



【開催報告】

Japan Open Science Summit 2021 「学術会議若手アカデミーと考えるオープンサイエンス」

日本学術会議若手アカデミーは、2021年6月14日から19日にかけてオンラインで開催された [Japan Open Science Summit 2021 \(JOSS2021\)](#) において、「学術会議若手アカデミーと考えるオープンサイエンス」と題する企画セッションを開催しました。JOSSはオープンサイエンスをテーマとした日本最大のカンファレンスで、各研究分野の研究者、大学図書館員やURAといった支援者、IT基盤の研究開発者に加え、政策立案者や企業・NPO関係者、さらに市民科学者（シチズンサイエンティスト）などが参集しました。本セッションでは、日本学術会議の45歳未満の会員・連携会員から構成される若手アカデミーのメンバーとともに、若手を取り巻く環境と課題を考慮しつつ、学術と社会のよりよい関係構築に資するオープンサイエンスのあり方を議論しました。登壇者と演題は以下の通りです。

セッションの冒頭、岩崎渉・若手アカデミー代表（東京大学）から、若手アカデミーの紹介があり、バイオインフォマティクス分野におけるオープンサイエンスの歴史と現状について説明がありました。次に新福洋子・前副代表（広島大学）から、Global Young Academy (GYA) におけるオープンサイエンスの動向について報告があり、2022年6月に九州大学で開催予定のGYA総会では、市民の科学的プロセスへの参加がメインテーマの1つとなることがアナウンスされました。ついで小野悠・幹事（豊橋技術科学大学）から「地域連携から見たオープンサイエンス」と題して、学術と社会の間に立つ人材を評価したり、学術をより広義に捉え直す仕組みが必要だという提案がありました。また、高瀬堅吉・前幹事（自治医科大学）から「心理学におけるシチズンサイエンスの展開」と題して、A(cademia)&C(itizen), B(usiness)&C, C&Cという3つのタイプのシチズンサイエンスの枠組みが提案されました。

最後に、アカデミー外部からのスピーカーとして、お笑い芸人兼サイエンスコミュニケーター兼研究者である黒ラブ教授から、「サイエンスコミュニケーターからみたオープンサイエンス」についての話題提供があり、さまざまな視点から見たオープンサイエンスのあり方について、熱のこもった議論が交わされました。

（報告者：近藤康久・地域活性化に向けた社会連携分科会幹事／総合地球環境学研究所）